

昔話絵本の絵が幼児の理解および作話に及ぼす影響

藪中 征代

The effects of Japanese folk tales on the comprehension and story-making of pre-school children

YABUNAKA, Masayo

要旨

本研究は、同一の物語を表現した絵本『ももたろう』の絵に注目し、視覚的情報としての絵の違いが、幼児の物語の理解および作話にどのように影響するかを検討した。提示した絵は、写実的に詳細に描かれている絵（複製版絵本条件）と線や形中心の抽象的に描かれている絵（マンガ版絵本条件）の2種類である。5歳児34名を複製版絵本条件18名とマンガ版絵本条件16名に分け、それぞれ3枚の絵カードを見せ、理解課題と作話課題を実施した。理解課題は、3枚の絵カードに何が描かれているか質問した。作話課題は、3枚の絵カードで話を作ることを求めた。理解課題については、(1)複製版絵本条件の方がマンガ版絵本条件に比べて、幼児の「事実」の発話が有意に多い、(2)「感想」はマンガ版絵本条件からは発話されなかった、ことが示唆された。作話課題については、(3)幼児が作話したエピソード数は、複製版絵本条件の方がマンガ版絵本条件に比べて有意に多い、(4)複製版絵本条件の方がマンガ版絵本条件よりも内容語を有意に多く産出した、ことを示唆する結果を得た。これらの結果より、写実的で詳細な絵からの方が情報量が多く、5歳児の発話をうながし、想像力を促進させることが明らかとなった。また、絵が線や形中心の抽象的な絵からは、幼児の発話は多く引き出すことができず、登場人物に対するイメージの広がりも認められず、幼児の想像力の妨げになった可能性が示唆された。

問題と目的

絵本がもつ意味とはどのようなことであろうか。この問いは、子どもの成長にとって絵本とはどのような意味をもっているかという問題と読み手の大人と聞き手の子どもの両者にとって、絵本がどのような意味をもつかという問題である。この問題を検討していく方法として、絵本そのものに焦点を絞って考察する方法と絵本と人との関係を見る方法とがある（松居，2002）。本研究では、絵本がもつ意味について、聞き手側である幼児がどのように評価するかという視点に立って検討していく。

近年の絵本を取り巻く状況は、読者層が子どもから大人まで広がり、絵本について関心が集まっている。家庭では、乳児から親子の絵本を介した体験、保育所や幼稚園では、集団の場における絵本とのかかわりがあり、絵本は欠かせないものとなっている。このことは、幼稚園教育要領の領域「言葉」における内容の取扱いにも記され、絵本が幼児期の子どもの発達において重要な役割を担っていることがわかる。すなわち、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」（文部科学省，2008）である。

ところで、家庭や保育現場における絵本を介した活動が、子どもの発達にどのような意味をもつかについては、色々な角度から検討されている。その一つとして、絵本の絵が子どもの

思考に影響を及ぼすという側面があげられる。玉瀬（1990）は、幼稚園年長児（ $N=48$ 名）を対象に、文章と絵の提示方法の違いが物語内容の記憶に及ぼす影響を検討した。幼児は、物語を文章のみで提示される群、絵のみで提示される群、文章と絵を提示される群のいずれかに分類され、各群で物語を提示された後、物語再生テストを行った。その結果、文章+絵群、絵のみ群ともに文章のみ群に比べて、より物語を再生することができ、絵が物語の記憶の助けとなるということが明らかとなった。佐藤（1980）は幼児の物語理解において、挿絵がある条件の方が挿絵なしの条件よりも、理解が促進されるという結果を示した。このことから視覚の手がかりである挿絵は物語の構造に関する枠組みを聞き手に与え、物語理解を促進させる役割を果たしていると考えられる。一方で、丸野・高木（1979）は、幼児に物語を読み聞かせる際に各場面を描いた絵画情報を順序に即して提示したが、顕著な効果をとらえることはできなかったとしている。このように佐藤（1980）と丸野・高木（1979）では異なった結果が得られた。この結果の違いは、与える視覚の手がかりとしての絵によって、理解や産出の促進に異なった効果があることを予想させる。

ところで、絵本の絵のもつ意味は幼児の思考に影響を及ぼすだけではない。佐々木（1980）は、「すぐれた絵本の絵は、子どもたちの経験や認識力をよく踏まえ、彼らの表象や想像をいきいきと引き出すように描かれ、すぐれた文章は、子どもたちの

想像力を強く刺激する」と述べている。また、内田(1986)は、「幼児期からの想像による創造の営みは、子ども自身の精神生活を豊かにし、将来的にその一部は科学、芸術、技術のようなものとして具象化されていく」と、絵本と想像力の関係の重要性を指摘している。しかし、絵本の絵が子どもの想像力に影響を及ぼすという点については、佐々木(1980)に代表される主観的意見は多く見受けられるが、実証的研究は少ない。そこで本研究では、絵本の絵と想像力の関連について検討していくこととした。

一方、幼児の物語構成に関する認知心理学的研究は数多くなされ、以下のような知見が示されている。まとまりのある一貫した物語を作るためには、①発端部-展開部-解決部といった物語展開構造に関する一般的な知識(エピソード構造、物語スキーマ)や、特定のテーマに関する豊富な既有知識(経験)をもっていること、②複数の事象間の因果関係を推論でき、それを表現する統語能力をもっていること、③物語の目標構造や欠如-補充の枠組みを理解・保持し、作話過程をモニタリングできること、が重要であり、これらは5歳半ごろを境に可能になる(Trabasso et al.,1981;内田, 1982, 1983, 1985, 1986, 1989; 秋田・大村, 1987)。これらの知見から、物語を創作することは5歳半ごろから可能となることより、本研究では年長クラスの幼児を対象とする。

昔から人間は、人生を生きる意味や自分を取り巻く世界の意味を考えて探り、そこから得られた知恵を昔話という物語の形をとって語り伝えてきた。その人間の知恵が、現在では大きく変貌しているように感じる。現在、1年間に2000冊余りの絵本が出版されている(出版ニュース社, 2002)が、取り扱う内容も多様化している。その中には、同一タイトルの作品であっても、教育的配慮から絵や文章、モチーフの微妙な改作によって話が省略されたり、テーマが変質したりしている作品が多い(藪中・福沢, 2005a)。また、日本の昔話絵本の多くは、絵がマンガ調で描写されており(以下マンガ版絵本と記す)、子どもの好みもマンガ調に偏っている傾向がある(中澤・中道・大澤・針谷, 2005)。したがって、このような昔話絵本の絵の違いは、幼児の物語理解や想像力にどのような影響を及ぼすか明らかにすることは、幼児の読みを考えていく上で大変有益であると考えられる。

ここで同一タイトルの昔話絵本を読書材として、視覚的情報の違いについての研究を紹介する。藪中・福沢(2005a, 2005b)は、同一タイトルのマンガ版(絵がマンガ調で描かれている)と詳細版(絵がリアルに詳細に描かれている)の昔話絵本『ももたろう』を読書材として、成人および児童が、文章や絵、テーマに対してどのような理解やイメージをもつかということを検討した。その結果、詳細版絵本の方がマンガ版絵本に比べ、知識を多く得ることができ、絵に対して本物のように感じる、

生々しい感じがする等の絵に対するリアル性を高くとらえ、色使いがきれいだ、絵が好きだなどの絵に対する好みも高くとらえていることが示された。同一タイトルの昔話絵本であっても視覚的情報である絵が異なれば、聞き手が受けとるイメージが異なり、それによってテーマにも影響を及ぼすことが明らかとなった。特に、詳細版絵本では絵の違いが大いに影響を及ぼしており、絵から受けるリアルさにおいて顕著にこの傾向が認められた。

視覚的情報の違いによる物語理解や作話の効果について、幼児を対象とした研究は少ないが、中澤ら(2005)の絵の表現形式についての研究を以下に紹介する。同一タイトルの絵本『三匹のくま』の絵に注目し、絵の違いが幼児の物語理解・想像力に及ぼす影響について検討したものである。かわいいイメージの絵の『三匹のくま』と、そうでない『三匹のくま』のいずれかを5歳児に読み聞かせたところ、後者の『三匹のくま』の方で、物語理解が促進され、想像が広げられることが明らかとなった。この研究では、5歳児はかわいいイメージの絵を好むこと、絵の表現形式(かわいいイメージの絵とそうでない絵)がイメージ形成に影響し、かわいいイメージの絵は幼児の想像力を抑制すること、が明らかにされた。すなわち、絵が幼児の理解をうながす重要な要因であること、さらに、絵は想像力にも影響を及ぼすことが示された。このことから、絵の印象が異なることによって、聞き手である幼児は、それぞれ異なる思考を巡らせることが示唆された。

以上述べてきたように、絵本の絵が異なることで、幼児の想像性の働き方には違いが生じると予想される。中澤ら(2005)の研究では、絵本の絵が幼児の物語理解と想像性に影響を及ぼすことは明らかにされているものの、読書材は『三匹のくま』に限定されている。そこで、日本の昔話絵本を読書材にして、どのような絵が幼児の想像性を育むかを検討する必要があるだろう。また、作話課題は、同一の文章に揃え読み聞かせた後、その続きを創作するというものであった。藪中・福沢(2005a)の研究では、文章と絵のイメージが一致することが物語の理解を促進させるという結果が示されている。その点から考えれば、まずは、絵本の絵のみを使用した作話課題について検討することが重要であろう。

そこで本研究では、日本の昔話絵本の一つである『ももたろう』を取り上げる。『ももたろう』を読書材とした理由は次の点からである。『ももたろう』の話は、日本の昔話の中でも最もポピュラーなものである。小さい子どもが親元を離れて冒険の旅に出るという話の内容は、児童文学の一つのパターンでもあることから、『ももたろう』の話には、国や時代を超えた普遍性があると考えられよう。そして、この絵本は、多くの幼稚園や保育所、家庭で読み聞かされている。したがって、幼児にとってなじみが深く、この物語の内容をまったく知らないとい

う幼児が少ないと考えられよう。そのために、物語の内容を理解できたか否かという違いによって、想像性の喚起が左右される可能性は低いと考えられる。したがって、異なるタイプの絵を用いた作話の場合、もしも幼児の想像性の反応が異なるとすれば、それは絵がもたらした影響であると考えられることができるであろう。

以上をふまえ、本研究では年長児クラスの幼児を対象に、同一の物語を表現した絵本『ももたろう』を読書材として、視覚的情報としての絵の違いが物語の理解および作話に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

方 法

調査参加者

埼玉県内のS幼稚園年長児34名(男児17名, 女児17名)を対象とした。平均年齢は5歳8ヵ月である。調査参加者を新・講談社の絵本の絵カードを見せる復刻版絵本条件とデラックス版マンガ日本昔話絵本の絵カードを見せるマンガ版絵本条件に分けた。2条件は月齢と言語能力について統制を行った。言語能力に関しては、田中ビネー知能検査の下位検査「語彙」の評定点で等質であることを確認した($F(1, 32)=0.90, n.s.$)。さらに、調査参加者については幼稚園教諭から聞き取りを行い、標準的な発達であると判断した。各条件の人数の内訳は、復刻版絵本条件18名(男児8名, 女児10名; 平均年齢5歳8ヵ月)、マンガ版絵本条件16名(男児9名, 女児7名; 平均年齢5歳8ヵ月)である。

読書材

現在、出版されている『ももたろう』の絵本は、64種類ある。この64種類の絵本の絵を分析すると、様々なタイプの絵があるが、大きくは次の2つのタイプに分類できる。アニメやマンガ調で抽象的に描かれ、色調は原色を多く使っている絵と写実的に詳細に描かれ、色調は落ち着いた本物に近い色使いをしている絵の2つである。絵の印象が異なる64冊の『ももたろう』の絵本の中から、①写実的に詳細に描かれ、色調は落ち着いた本物に近い色使いをしている絵、②アニメやマンガ調で抽象的に描かれ、色調は原色を多く使っている絵の絵本をそれぞれ3冊ずつ選定した。絵の印象が異なると思われる6冊の『ももたろう』の絵本を大学院生10名に提示し、まったく異なる印象の絵の絵本を2冊選定することを求めた。その際、それぞれの絵本の絵の特徴を自由記述で求めた。

6冊の絵本は、A絵本「千葉幹夫/文、斉藤五百枝/画、講談社、2001」(図1)、B絵本「小沢俊夫/再話、赤羽末吉/画、福音館書店、1995」(図2)、C絵本「松居直/文、赤羽末吉/画、福音館書店、1965」(図3)、D絵本「山口俊子/構成、講談社、1984」(図4)、E絵本「柳川茂/文、宮尾岳/イラスト、永岡書店、



図1 A絵本



図2 B絵本



図3 C絵本



図4 D絵本



図5 E絵本



図6 F絵本

1998」(図5)、F絵本「いもとようこ/作、岩崎書店、2001」(図6)であった。

10名の大学院生が選定した絵本は、A絵本(図1)とD絵本(図4)となった。それぞれの絵本の特徴は以下に示すとおりである。

A絵本:『新・講談社の絵本 桃太郎』(2001) 千葉幹夫/文、
斉藤五百枝/画、講談社

この絵本は、写実的で細部にわたり詳細に描かれ、色調は落ち着いたものであり、ほぼ本物に近い色使いであり、登場人物もリアルに描かれている。復刻版絵本とは、2001年に復刊された新講談社絵本であり、1937年発刊当時の一流の日本画家にその絵を依頼し、出来上がった日本画の絵本である(以下復刻版絵本と記す)。これらの作品は、1937年から200冊以上刊行された絵本の中から、21世紀に残したい昔話絵本として復刊希望の多かつ

た絵本である。これらのことから、A絵本を復刻版絵本条件とした。

D絵本：『デラックス版まんが日本昔ばなし絵本 桃太郎』
(1984) 山口俊子/構成, 講談社

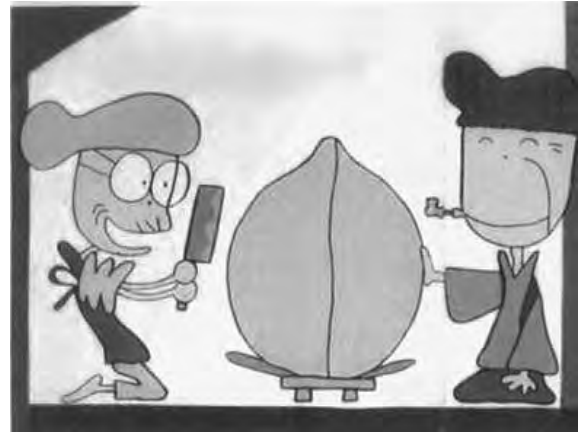
この絵本は、登場人物は線や形で簡略化され、かわいい印象を与える抽象的に描かれ、色調は明るくメルヘン的な絵として

特徴づけられる。テレビで放映されていた「まんが日本昔話」を絵本版にしたものであることから、D絵本をマンガ版絵本条件とした。

上記の絵本の中から、①桃太郎誕生場面、②桃太郎が3匹の動物（いぬ、さる、きじ）と鬼が島へ鬼退治に行く場面、③鬼が島での鬼退治の場面の3場面を絵カードにした（図7、図8



場面1



場面1



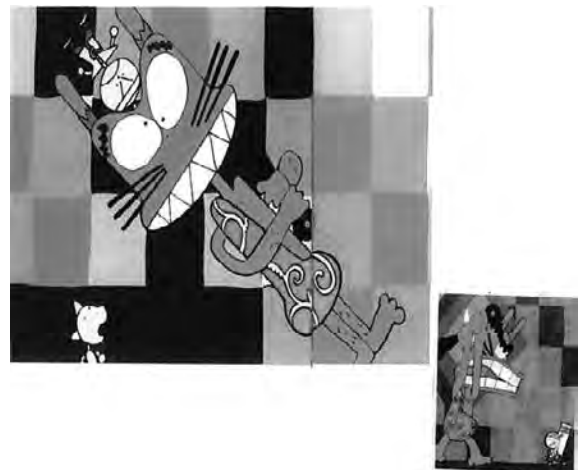
場面2



場面2



場面3



3場面

図7 復刻版絵本の絵カード

図8 マンガ版絵本の絵カード

参照)。3つの場面については事前に大学院生8名のインタビューにより抽出した。

課題

①理解課題

3枚の絵カード(図7, 図8参照)を最初に1場面2秒程度提示し, その後, 何が描かれているかを質問した。また, 「このお話はどんなお話か知っていますか」と質問し, 調査参加者全員が知っている話であることを確認した。

②作話課題

「この絵はどんなお話だと思いますか。お話を作ってみてください」と自由に創作することを求めた。調査参加者が話を始めるのを躊躇しているときには, 「思ったように作っていいよ」などと声をかけ, リラックスして課題ができるように配慮した。発話が途切れたときは, 「それでは?」「次は?」とうながし, それでも言語反応が見られない場合は「とばそうか?」と尋ね, 承諾を得た後, 次の場面に進んだ。課題実施時には, 調査者は常に肯定的なうなずきを入れ, 調査参加者が自信をもって課題に取り組めるように心がけた。

手続き

調査場所は, 調査参加者の所属する幼稚園の使用されていない一室であった。課題を実施する前に, 調査者は調査参加者に名前を聞くなどし, ラポールを形成した。課題は, 理解課題, 作話課題の順に行った。調査参加者の発話は, すべてICレコーダーに録音し, 補助的にビデオにも記録した。その後, 発話データを基に逐語録を作成した。

評価方法

①理解課題

「この絵は何が描かれていますか」という質問に対する幼児の発話内容を, 事実(幼児の発話内容が絵に描かれている内容である場合)と感想(幼児の発話内容が絵から想像した内容である場合)に分けて分類し, 幼児の発話のエピソード数を求めた。

②作話課題

幼児が創作した話を意味内容のまとまりで区切ったエピソード数を求めた。1エピソードにつき1点を与えた。この内容について, 事実と感想の2種類に分類した。また, エピソードを品詞に分類し, 品詞別語彙数を算出した。

結果と考察

1. 理解課題

a) エピソード数

得点化を調査者ともう1名の評定者が独立に行ったところ, 理解課題の評定一致率は89%であった。不一致の場合は, 調査

Table1 場面ごとの事実と感想のエピソード数の平均値(標準偏差)

場面	復刻版絵本(n=18)		マンガ版絵本(n=16)	
	事実	感想	事実	感想
1	5.28(1.49)	3.56(1.38)	5.44(1.55)	0
2	5.33(2.52)	1.94(1.98)	4.00(1.90)	0
3	4.17(2.31)	3.44(1.50)	1.88(1.26)	0
全体	14.78(3.83)	8.94(3.44)	11.31(3.00)	0

者の評定を採用した。

Table 1に場面ごとの事実と感想のエピソード数の平均値を示した。

絵の違いによる幼児の発話内容の差異を明らかにするために, 事実と感想に分けて分析を行った。まず, 事実について絵の違いによる影響を検討した結果, 復刻版絵本の方がマンガ版絵本より事実の発話が有意に多いことが明らかとなった($t=11.62, df=32, p<.001$)。また, 場面ごとの絵の違いによる幼児の事実発話内容の違いを検討した。その結果, 場面1($t=0.31, df=32, n.s.$), 場面2($t=1.73, df=32, n.s.$)では, 有意な差は見られなかったが, 場面3において復刻版絵本の方がマンガ版絵本より事実発話が有意に多いことが明らかとなった($t=2.29, df=32, p<.001$)。感想についてはTable 1に示したとおり, マンガ版絵本からは発話は全く認められなかった。

これらの結果より, 復刻版絵本の方がマンガ版絵本より, 幼児の「事実」の発話が有意に多いことが明らかとなった。復刻版絵本は, 絵が詳細に描かれており, 絵からの情報が多く得られることにより, 幼児の「事実」発話が多くなったと考えられる。また, 復刻版絵本は絵が詳細に描かれ, 絵からの情報量がマンガ版に比べると多いことにより, 登場人物に対するイメージが喚起され, 「感想」の発話もみられたのであろう。それに対してマンガ版絵本では, 絵が線と形中心で簡略に描かれ, 絵から得られる情報が少なく, どのように言語化していいかわからないために, 幼児の「感想」の発話がなかったと考えられる。対象幼児にとっては, 言語化することが難しい絵であるといえよう。

b) 事実発話の誤答

幼児の「事実」発話における誤答をした人数をTable 2に示した。誤答について絵の違いによる影響を検討した結果, 復刻版絵本に比べマンガ版絵本の方に誤答が有意に多く認められた($\chi^2(1)=54.70, p<.01$)。誤答の内容をみると, 「まないた」を「だいたいいた」, 「ほうちょう」を「ナイフ」と誤答した幼児は, 提示されたモノの名前を知らないためであると考えられる。「いぬ」を「ねこ, きつね」, 「ももたろう」を「にんげん・男の子」, 「きじ」を「とり・つる・にわとり」と誤答したのはマンガ版絵本条件の幼児の方が多い。この時の幼児の発話は「よくわからな

い」といいながら、「ねこみたい」「きつねみたい」と発話している。また、本調査では、「ももたろう」の話を知っている幼児を対象としたが、「ももたろう」を「にんげん・男の子」と誤答した幼児がマンガ版絵本の方に多くみられた。これについては、どちらの絵からも何らかのイメージは喚起されたものと思われる。しかし、マンガ版絵本では、絵が抽象的であるためにそのものを特定することが難しかったと考える。なぜなら、マンガ版絵本の絵は線と形を中心とした抽象画で、その線も単純化され、描かれている動物やももたろうが明確に特定できにくかったために、絵を見ても「よくわからない」という否定的な発話のみられ、それが誤答につながったと考えられよう。

2. 作話課題

a) 場面ごとのエピソード数

得点化を調査者ともう1名の評定者が独立に行ったところ、作話課題の評定一致率は90%であった。不一致の場合は、調査者の評定を採用した。

Table 3に場面ごとの創作した話のエピソード数の平均値を示した。創作した話のエピソード数は、復刻版絵本の方がマンガ版絵本に比べて、有意に多かった ($t=10.12, df=32, p<.001$)。次に、絵の違いによる場面ごとのエピソード数の差異について検討した結果、場面1 ($t=8.49, df=32, p<.001$)、場面2 ($t=7.13, df=32, p<.001$)、場面3 ($t=9.78, df=32, p<.001$)ともに、復刻版絵本の方が有意にエピソード数が多かった。これらの結果から、幼児の創作した話のエピソード数は、どの場面においても復刻版絵本の方が有意に多いことが明らかとなった。簡略化された抽象的なマンガ版絵本からは幼児の発話は引き出すことが困難

Table2 「事実」発話を誤答した人数

正答	誤答	誤答数	
		復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
まないた	だい・いた	0	3
ほうちょう	ナイフ	7	15
きじ	とり・つる・にわとり	4	15
ももたろう	にんげん・男の子・おにいさん	6	16
さる	動物	1	4
いぬ	おおかみ・ねこ・きつね	2	10
おに	おじさん・悪者	0	8
合計		20	71

Table3 創作した話のエピソード数の平均値 (標準偏差)

場面	復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
1	16.39 (3.93)	6.44 (2.71)
2	14.50 (4.12)	5.19 (3.41)
3	15.56 (3.42)	4.81 (2.93)
計	46.44 (9.75)	16.44 (7.16)

であり、イメージの広がりもあまり認められないと考えられる。

b) 作話内容のエピソード数

Table 4に幼児が創作したお話の内容について「事実」と「感想」に分類し、そのエピソード数の平均値を示した。創作したお話の「事実」と「感想」のエピソード数に及ぼす絵の違いを検討した。その結果、「事実」と「感想」のどちらにおいても、マンガ版絵本より復刻版絵本の方がエピソード数が有意に多いことが明らかとなった (事実： $t=10.10, df=32, p<.001$ ；感想： $t=5.39, df=32, p<.001$)。

これらの結果より、復刻版絵本は絵が詳細に描かれており、絵からの情報が多いが、マンガ版絵本では、絵が簡略化され、情報量が少ないために作話のエピソード数も少なくなるということが示唆された。

c) 場面ごとの語彙数

Table 5に場面ごとの作話した話の総語彙数の平均値を示した。ここでは、幼児が創作した話の総語彙数に及ぼす絵の違いを検討した。その結果、語彙数においては、どの場面においても復刻版絵本もマンガ版絵本も有意な差はみられなかった (場面1： $t=0.97, df=32, n.s.$ ；場面2： $t=0.63, df=32, n.s.$ ；場面3： $t=1.30, df=32, n.s.$ ；全体： $t=0.37, df=32, n.s.$)。

d) 品詞別総語彙数

幼児のエピソードを品詞に分類し、品詞別語彙数を算出した結果をTable 6に示した。どちらの絵本においても名詞が一番多く、続いて動詞の順であった。品詞別の語彙数に及ぼす絵の違いを検討するために、 t 検定を行った。その結果、名詞、形容詞において、復刻版絵本の方がマンガ版絵本に比べて有意に多かった (名詞： $t=2.43, df=32, p<.05$ ；形容詞： $t=4.81, df=32, p<.01$)。また、副詞、接続語においては、マンガ版絵本の方が、復刻版絵本より有意に語彙数が多かった (副詞： $t=-2.60, df=32, p<.05$ ；接続語： $t=-2.49, df=32, p<.05$)。

次に、絵の違いによる品詞の使用人数を検討した。その結果、名詞、動詞はどちらの条件も全員が使用しており、形容詞を使用した幼児は、復刻版絵本16名、マンガ版絵本6名であり、復

Table4 作話内容のエピソード数の平均値 (標準偏差)

	復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
事実	23.56 (6.66)	4.88 (1.41)
感想	22.89 (5.39)	11.56 (6.85)

Table5 場面ごと語彙数の平均値 (標準偏差)

場面	復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
1	36.83 (10.21)	30.69 (24.69)
2	28.56 (15.97)	24.44 (18.71)
3	27.78 (16.29)	20.00 (18.58)
計	81.50 (45.91)	75.13 (55.41)

刻版絵本の方が有意に形容詞を使った幼児が多かった ($\chi^2(1) = 9.80, p < .01$)。形容動詞を使用した幼児は、復刻版絵本16名、マンガ版絵本3名で、復刻版絵本の方が有意に形容動詞を使った幼児が多かった ($\chi^2(1) = 16.92, p < .001$)。副詞を使用した幼児は、復刻版絵本で11名、マンガ版絵本で13名であり、人数の差はみられなかった ($\chi^2(1) = 1.66, n.s.$)。ここで使用された副詞は、「まず」「すぐ」「よく」であった。また、代名詞を使用した幼児は、復刻版絵本で7名、マンガ絵本で8名であり、人数の差はみられなかった ($\chi^2(1) = 0.42, n.s.$)。擬声・擬音語を使用した幼児は、復刻版絵本で6名、マンガ版絵本で6名であり、人数の差はみられなかった ($\chi^2(1) = 0.06, n.s.$)。接続語を使用した幼児は、復刻版絵本で7名、マンガ版絵本で16名であり、マンガ版絵本の方が接続語を使用した幼児が有意に多かった ($\chi^2(1) = 14.45, n.s.$)。復刻版絵本で使用された接続語は、「それで」「で」「そしたら」であった。これに比べて、マンガ版絵本では、全員の幼児が接続語を使用していたが、その内容は「えーと」「んーと」と言いよどみ語がほとんどで、絵が抽象的であるために、言語化に努力を要しており、発話をうながすのが難しかったと考えられる。

e) 内容語と機能語の分類

ここでは内容語 (content words) と機能語 (function words) に分類して考える (Fries, 1952)。内容語とは、語彙の意味をもつ語 (内容を表す語彙) のことであり、機能語とは、語彙の意味はほとんどもたず、文法的な働きをもつ語 (文法構造のための語彙) のことである。幼児のエピソードを内容語と機能語に分類し、それぞれの総語彙数を算出した結果をTable 7に示した。内容語は復刻版絵本の方がマンガ版絵本に比べ、有意に多かった ($t = 2.85, df = 32, p < .05$)。機能語はマンガ版絵本の方が復刻版絵本に比べ有意に多い ($t = -2.41, df = 32, p < .05$)。復刻版

Table6 品詞別総語彙数の平均値 (標準偏差)

品詞	復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
名詞	51.89 (21.43)	34.38 (20.47)
動詞	29.94 (12.19)	25.00 (19.91)
形容詞	5.11 (2.81)	2.06 (3.41)
形容動詞	2.39 (1.79)	0.19 (0.40)
副詞	1.28 (1.49)	3.44 (3.16)
代名詞	0.56 (0.86)	1.31 (1.96)
擬声・擬音語	0.44 (0.70)	0.94 (1.65)
接続語	1.56 (3.35)	7.81 (10.06)

Table7 内容語と機能語別語彙数の平均値 (標準偏差)

	復刻版絵本 (n=18)	マンガ版絵本 (n=16)
内容語	91.06 (33.97)	66.00 (44.83)
機能語	2.11 (3.56)	9.13 (11.76)

絵本では、詳細に絵が描かれており、絵に情報が多く示されていることから、内容語が多くなったと考えられる。機能語は絵からの情報に直接関係していないために、本調査では多く使用されなかったのであろう。

総合的考察

本研究の目的は、5歳児を対象にして、絵の印象が異なる絵本『ももたろう』を用いて、視覚的情報としての絵の表現の違いが物語の理解および作話に及ぼす影響について明らかにすることであった。

理解課題、作話課題のどちらにおいてもマンガ版絵本を用いた時よりも、復刻版絵本を用いた時に、5歳児は多くのことばを発し、想像力を促進させることが本研究より明らかとなった。この結果は、中澤ら (2005) の研究結果を支持するものであった。また、抽象的な絵からは感想の発話は得られなかったが、詳細で写実的な絵からは、感想の発話が抽象的な絵に比べて多くみられた。このことは、絵が詳細に描かれていることにより、登場人物に対するイメージが促進され、感想の発話が多くなったと考えられる。

線や形を中心とした抽象的な絵からは、幼児の発話を多く引き出すことが難しく、言語化することが困難なために感想の発話は一切なかったのであろう。また、幼児の事実の誤答もマンガ版絵本に多かった。これらのことから、抽象的な絵は、登場人物に対するイメージの広がりもあまり認められず、幼児の想像力の妨げになったのではないかと考えられる。

本研究では、今まで検討されてこなかった絵の描き方が対照的な絵本を与えられた時の幼児の反応について実証的に検討したものである。また、経験的に語られることが多かった絵本の絵が幼児の理解や作話に対する影響について、特に日本画で写実的に描写された絵本の絵を読書材にして本研究において実証することができたことは、本研究の新しさであり大いに意味があると考えられる。同じ昔話絵本でも絵の違いが幼児の発話に影響を及ぼすことから、幼児に与える絵本の絵にも注目し、慎重に選択することが求められるであろう。たとえば、同じ内容の昔話絵本を幼児に読み聞かせする場合、幼児の想像性を育むことをねらいとしているのであれば、抽象的な絵ではなく、詳細に写実的に描かれた絵本を選択することが適切であろう。このように絵の印象が異なることによってその絵本によって育まれる幼児の心情・意欲・態度が異なることを認識し、保育のねらいに即した適切な絵本を選択することが、保育者に望まれることである。

文献

- 秋田喜代美・大村彰道.(1987). 幼児・児童のお話作りにおける因果的産出能力の発達. 教育心理学研究, 35, 65-73.
- Fries,C.C.(1952) *The Structure of English*. Univ.of Michigan Press.
- 古屋喜美代.(1996). 幼児の絵本の読み聞かせ場面における「語り」の発達と登場人物との関係－2歳から4歳までの縦断的事例研究. 発達心理学研究, 7(1), 12-19.
- いもとようこ/作.(2001). 『はじめてのめいさくえほん ももたろう』. 岩崎書店.
- 丸野俊一・高木和子.(1979). 物語の理解・記憶における認知的枠組形成の役割. 教育心理学研究, 27, 18-26.
- 松居直/文・赤羽末吉/絵.(1965). 『日本傑作絵本シリーズ ももたろう』. 福音館書店.
- 松居直.(2002). 絵本のよるこび. 日本放送出版協会.
- 文部科学省.(2008). 『幼稚園教育要領』. 文部科学省.
- 中澤潤・中道主人・大澤紀代子・針谷洋美.(2005). 絵本の絵が幼児の物語理解・想像力に及ぼす影響. 千葉大学教育学部研究紀要, 53, 193-202.
- 西川由紀子.(1995). 幼児の物語産出における「語り」の様式. 発達心理学研究, 6, 124-133.
- 野本有紀・長崎勤.(2007). 5.6歳児におけるナラティブの産出と理解－視覚的手がかりがリテリング (retelling) に及ぼす効果－. 障害科学研究, 31, 21-31.
- 小沢俊夫/再話・赤羽末吉/画.(1995). 『日本の昔話3 ももたろう』. 福音館書店.
- 佐々木宏子.(1980). 絵本－児童心理学からの研究視点をさぐる－. 藤原喜悦・磯貝芳郎・梶田淑一・柏木恵子・清水御代明・高橋恵子 (編), 児童心理学の進歩. 1980年版, pp.309-330. 金子書房.
- 佐藤公代.(1980). 幼児の絵本理解における挿絵の役割についての再吟味. 愛媛大学教育学部紀要, 28, 105-114.
- 出版ニュース社/編.(2002). 出版データブック1945-2000. 出版ニュース社.
- 玉瀬友美.(1990). 幼児の物語記憶に及ぼす文と絵の提示様式の効果. 読書科学, 34, 86-93.
- 千葉幹夫/文・齊藤五百枝/画.(2001). 『新・講談社の絵本 桃太郎』. 講談社.
- Trabasso,T.,Stein,N.L. & Johnson,L.R. (1981). *Children's Knowledge of Events: A Causal Analysis of Story Structure*. In Bower,G. (Ed), *The Psychology of Learning and Motivation*. Academic Press, 15, 237-282.
- 内田伸子.(1982). 幼児はいかに物語るか?. 教育心理学研究, 30, 47-58.
- 内田伸子.(1983). 絵画ストーリーの意味的統合化における目標構造の役割. 教育心理学研究, 31, 303-313.
- 内田伸子.(1985). 幼児における事象の因果的統合と産出.教育心理学研究, 33, 124-134.
- 内田伸子.(1986). ごっこからファンタジーへ 子どもの想像世界.新曜社.
- 内田伸子.(1989). 物語ることから文字作成へ：読み書き能力の発達と文字作文の成立過程. 読書科学, 33, 10-24.
- 若山育代・表祐未.(2011). 絵本の挿絵が4歳児の共感性に及ぼす影響－印象の異なる2種類の絵本を用いた読み聞かせによる検討－. 富山大学人間発達科学部紀要, 6(1), 91-97.
- 藪中征代・福沢周亮.(2005a). 児童における昔話絵本のイメージおよび理解の分析. 日本教材学会第17回研究発表大会.
- 藪中征代・福沢周亮.(2005b). 昔話絵本におけるイメージおよびテーマの構造. 教材学研究, 16, 7-10.
- 山口俊子/構成.(1984). 『デラックス版マンガ日本昔ばなし絵本 桃太郎』. 講談社.
- 柳川茂/文・宮尾岳/イラスト.(1998). 『日本昔ばなしアニメ絵本(5) ももたろう』. 永岡書店.

付記

調査にご協力いただきました幼稚園の園児の皆様と先生方に厚く御礼申し上げます。本論文は、日本教材学会第18回研究発表大会にて発表した研究に、再分析を行ったものです。